

〔新収品紹介 1〕

一休宗純像 伝曾我蛇足筆

室町時代 絹本墨画淡彩 73.7cm×28.0cm

この「一休宗純像」は、江戸末期に編集された画家伝記『古画備考』に蛇足筆一休自賛像としてその略図とともに掲載されておりますが、昭和38年に当館で開催された一休和尚特別展で初公開され話題をよびました。近年縁あって当館が所蔵するところのものとなりました。

「一休さん」といえば、和尚さんや大人を頓知でやっつける小賢しい小坊主というイメージがありますが、じっさいは、詩文に長じ書画も巧みで、一方酒屋や遊里に出入りし、女性を愛したりもした禅僧としてはかなり型破りで人間味ある人物だったようです。

文明6年(1474)、一休八十一歳のとき、推されて大徳寺第47世の住持になりますが、すぐに退寺し、晩年は京都南部の田辺新村の酬恩庵でおくり、文明13年、八十八歳で没しました。大徳寺を再興させた高僧として知られています。

この頂相(ちんそう、禅宗では師の肖像をこう呼ぶ)は、自賛の款記に「前大徳一休」とあるので、八十一歳以降のときのものに違いなく、円相の肖像としてめずらしいものです。円相には鏡中像の意味があり、またその人の人格とところを象徴します。ここでは円相をのぞいた部分には淡墨をはき、その中に袈裟をつけ威儀をただした半身像を描いていますが、水墨による面貌の精写な描法や衣文線の荒い筆致は、一休画像としてはかなり個性的なもので、作者の高い技量を示すとともに、像主と画家との親密な関係を感じさせます。

円相の真下に「赤蠅」とよめる朱文方印が捺されています。この印章は曾我蛇足のものではないかといわれています。「蛇足」という名は何人が使ったようで、その一人に、真珠庵障壁画の筆者と考

えられている一休の弟子で画僧である夫泉宗丈(ぶんずい)がおります。つまり、この肖像は蛇足(宗丈)が描き、一休が賛をし、伝法の印可(証明)として蛇足その人に与えたものではないかと思われま

(賛の釈文)「大燈の仏法、光輝を没す、竜宝山中、今誰か有る。東海の児孫、千載の後、吟魂猶苦しむ、許渾の詩」。(林進)

一休宗純像 伝曾我蛇足筆



季刊 美のたより No.80

昭和62年 8月20日

発行 大和文華館